教科目標

言語聴覚士科

１．養成目的

障害を抱える「人」及びその家族に寄り添い、支えられる人材として、自律協働し、現場でキーパーソンとして活躍できる言語聴覚士を養成する。

２．教育目標

学校生活を通して「自律」を身に付け、現場で求められる協働、評価、機能回復のため知識・技術を修得（学んで身につける）し、国家試験に合格する。

３．カリキュラム

教育内容		科目	総時間数 （総単位数）
モチベーションプログラム	基礎分野	導入教育 ／ 国際教育/ 心理学Ⅰ・Ⅱ ／ 国語表現法 /プロ養成講座Ⅰ・Ⅱ・Ⅲ ／ 法学 ／ 社会学 ／ 生物学 ／ 統計学 ／ コンピューターⅠ・Ⅱ ／ 英語Ⅰ ／ 英語Ⅱ（医療英語）／ 保健体育	３６０ （２４）
ミッションプログラム	専門基礎分野	医学総論 ／ 解剖学Ⅰ ／ 病理学 ／ 生理学 ／ 内科学 ／ 小児科学 ／ 精神医学/ リハビリテーション医学 ／ 耳鼻咽喉科学 ／ 臨床神経学 ／ 形成外科学 ／ 臨床歯科医学・口腔外科学Ⅰ・Ⅱ ／ 聴覚心理学 ／ 呼吸発声発語系の構造・機能・病態Ⅰ・Ⅱ /リハビリテーション概論/ 聴覚系の構造・機能・病態Ⅰ・Ⅱ /神経系の構造・機能・病態Ⅰ・Ⅱ/ 臨床心理学 ／ 生涯発達心理学 ／ 学習・認知心理学 ／ 音響学 ／ 音声学/ 心理測定法Ⅰ・Ⅱ ／ 言語学Ⅰ・Ⅱ/ 言語発達学Ⅰ・Ⅱ ／ 社会保障制度・関係法規	８４０ （５６）
プロフェッショナルプログラム	専門分野	言語聴覚障害概論Ⅰ・Ⅱ・Ⅲ ／ 言語聴覚障害診断学Ⅰ・Ⅱ・Ⅲ ／ 失語症Ⅰ・Ⅱ・Ⅲ ／ 高次脳機能障害学Ⅰ・Ⅱ・Ⅲ ／ 言語発達障害学Ⅰ・Ⅱ・Ⅲ /音声障害Ⅰ・Ⅱ ／ 機能性器質性構音障害Ⅰ・Ⅱ ／ 運動障害性構音障害Ⅰ・Ⅱ ／ 嚥下障害Ⅰ・Ⅱ・Ⅲ ／ 吃音 ／ 小児聴覚障害Ⅰ・Ⅱ ／ 成人聴覚障害Ⅰ・Ⅱ ／ 聴力検査法Ⅰ・Ⅱ /補聴器・人工内耳 ／ 臨床実習Ⅰ・Ⅱ	１４２５ （７５）
	選択必修分野	臨床医学 ／ 解剖学Ⅱ・Ⅲ（解剖生理演習・画像診断）／ 医療安全 ／ 言語聴覚総合講座Ⅰ・Ⅱ・Ⅲ・Ⅳ・Ⅴ	２１０ （１４）
合計			２８３５ （１６９）

４．学年（学期）目標

学年	到　達　目　標
１年 （前期）	言語聴覚士の学びの素地となる基礎分野科目を中心に知識を身に付ける。 学内実習を通じ、臨床現場でのコミュニケーションのあり方を理解し、臨床家としての素地を養う。
１年 （後期）	言語聴覚士科の学びの基礎となる専門基礎分野科目を中心に知識・技術を身に付ける。 学内実習・科目授業を通じて、検査方法や評価方法を理解する。
２年 （前期）	言語聴覚士科の学びの基礎となる専門基礎分野科目・専門分野科目を中心に知識・技術を身に付ける。ＯＳＣＥ（客観的臨床能力試験）を通じ、知識・技能・医療人としての態度を養う。
２年 （後期）	評価実習を通して、臨床現場で求められる検査方法・評価に関する報告書類の作成ができるようになる。また、「協働の学び」でのプレゼンテーションを通じチーム医療への理解を深める。
３年 （前期）	臨床実習を通して、臨床現場で求められる検査・評価方法、訓練プログラム立案と実施、再評価等、一連の報告書類の作成ができるようになる。
３年 （後期）	国家試験合格に向け各自が弱点を把握し、合格力をつけるための対策を実施する。実習後授業、国家試験対策を通じて、臨床家として求められる臨床的思考能力と臨床技能を修得する。

５．取得目標資格

資格名	必・選	認定団体	認定方法
言語聴覚士	必修	厚生労働省	養成施設卒業（卒業見込）、 国家試験受験
コミュニケーションスキルアップ検定	必修	滋慶教育科学研究所	筆記試験

６．就職分野

就　職　分　野	職　　種	核　能　力
病院（リハビリテーション科、耳鼻咽喉科、小児科、形成外科、脳外科など）	言語聴覚士	評価・訓練能力
介護（老人保健施設、デイケア施設など）	言語聴覚士	評価・訓練能力
福祉（障害者福祉センター、小児療育センター、難聴幼児通園施設など）	言語聴覚士	評価・訓練能力
学校（通級指導教室、特別支援学校、聴覚障害、知的障害、肢体不自由など））	言語聴覚士	評価・訓練能力
企業（補聴器・嚥下食など）	言語聴覚士	評価・訓練能力